

陳舜臣さんを語る会通信

NO.80 Sep. 2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2022年9月1日

長編推理小説17作目『凍った波紋』、18作目『北京悠々館』

本号では『凍った波紋』（1970 毎日新聞社）と『北京悠々館』（1971 講談社）を取り上げました。なお、『凍った波紋』の初出は、『サンデー毎日』1969年7月27日号～70年5月24日号で、『北京悠々館』は書き下ろしです。まず、徳間文庫版『凍った波紋』各務三郎氏の「解説」を抜粋引用します。（編集委員 橘雄三）

徳間文庫版『凍った波紋』「解説」
小見出し、及び傍線は編集委員の加筆

◆『凍った波紋』『北京悠々館』あたりから急速に推理小説から遠ざかる

作者が『北京悠々館』（一九七二）あたりから急速に推理小説から遠ざかったのは、さびしい。『枯草の根』（一九六一）で登場した名探偵にして桃源亭主人、陶展文の大人ぶりを愛する一人として、なぜ遠ざかったのかと、理由を推理したくなったのも当然であろう。

◆普通小説へ移行の理由

そして『凍った波紋』に普通小説への移行の理由を発見した。

たとえばフカミ・パールの一人娘知子が、好もしく思っている若波に、レストランでさぐりをいれるシーン。「等さんのお家が淡水真珠でよかったですわね」

フカミ・パールの一社員にすぎない若波を名前で呼ぶ意味合いも含めて、知子はその言葉に恋人同士なら抱きかちの共犯意識をこめていっている。これが描写力のあらわれであるが、つづいて、

「……これなども際どい発言である。フカミ・パールは、ほとんど淡水真珠を扱っていない。したがって、深見、若波の両家は同業といっても、火花を散らす直接のライバルではなかった。」

彼女のことは、二人が結ばれるうえで障害がすくないことを、暗示しているのだった」

と、作者は、セリフ描写の裏を説明しにかかる。サーヴィス精神の発揮である。描写したのちに説明しなければならぬとしたら、小説家はただ疲労するのみである。

大上法心殺害の犯行現場である草むらに腹ばいになって、草いきれを吸いこんだときの世能警部の感慨について、「それは生命のおいである。生きていこうとしているものにおいて、生命がおびやかされると、それを守るために、人間はあがきながら、どんなことでもしかねないのだ。」

そう思うと、草いきれが急になまぐさくかんじられた」と描写する。ここでは作者は説明の要も感じていない。肩の力を抜きながら、法心殺害の裏に立ちのぼりはじめたまがまがしい空気のゆれを伝えていく。

だが、描写―説明のくりかえしは、発進―停止をくりかえす自動車のようにオーバーヒートを起す。

推理小説は、レックス・スタウトも指摘したように勸善懲悪の物語である。したがって作中人物像もプロットの犠牲になりやすい。ところが、小説一般は虚実皮膜の間にある物語と善悪さだかならぬ作中人物の挙げる指、運ぶ足どりに心理の発汗をうかがうところがある。推理小説家であろうとした作者

は、ディレンマに立たされる。省略をきかせた描写で、はたして読み手は想像力を働かせてくれるだろうか？

こうしてオーバーヒートし、普通小説へ移ったのではないだろうか？『凍った波紋』は、冒険小説の裏を書いたもの。表を書かなかったのは、陳舜臣にとつて戦争の悲劇がなまましすぎたせいでもある。敗戦後の一時期、家業の貿易にたずさわりながら、裏を書くとしたら、歴史物語に託するしかないと考えたはずである。中国史を透し見て、権謀術数の廃址から『秘本三国志』（一九七四）なる冒険小説を復元していることが、その証拠である。

一九八三年四月 各務三郎

■本号で取り上げた二作のあと、長編推理小説となると、『失われた背景』（一九七三）、『虹の舞台』（一九七三）、『闇の金魚』（一九七七）、『燃える水柱』（一九七八）くらいしか思い浮かびません。陳舜臣さんの執筆傾向は、圧倒的に中国ものに傾斜していきます。



徳間文庫版表紙

『凍った波紋』 キャッチコピー & 登場人物 ほか

『凍った波紋』文庫本キャッチコピー



毎日新聞社版表紙

神戸六甲山中で盗み撮り専門のカメラマン大上法心が墜落死した。県警の世能警部が捜査に乗り出す。つづいて大上の友人である増中利秋が琵琶湖で淡水真珠の養殖水槽に首を突っ込み、怪死してしまった。二人とも戦時中、中国で特務工作に従事していたことを知り、世能は背後関係を洗うが、歴史の間には生まれ、謎は深まるばかり…。真珠と特務工作という光と闇を舞台に歴史に弄ばれた者の宿命を描く長編推理小説。

作品の舞台

■神戸の山本通にあるフカミ・パールは、三階建、ブルー・タイルの建物で、手入れの行き届いた芝生の庭がついていて、いかにもくつろいだかんじだった。一階が事務所、二階が加工場、三階は店員の寝泊りする場所となっている。庭をへだてて、雪をかぶったように白い、瀟洒な建

物があり、それが社長の家族の住宅なのだ。(文庫版P.10)

■山本通四丁目に移住センターがある。戦前は国立海外移民収容所といって、南米への集団移民を出港までここに収容して、現地事情などの講習をした。戦時中は…。

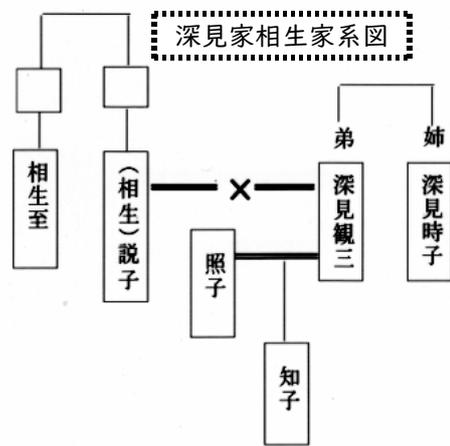
戦後は移住斡旋所となり、さらに移住センターと名を変えた。石川達三の『蒼氓』に、…。

その移住センターの西はしから、再度山ドライブ・ウェイが山にむかっている。車で二分そこそこ行くと、『閻道深』という額をかかげたトンネルにさしかかる。トンネルの入口の北側に階段があって、そこを登ったところが『太子の森』なのだ。(文庫版P.19)



再度山ドライブ・ウェイの入口
中央上端に「閻道深」の額
右手に進むと追谷墓地

主な登場人物紹介



- 深見観三 五十六歳。宝石商の老舗「フカミ」の御曹司。株式会社フカミ・パール社長。商売にはあまり熱心でない。美術を愛好
- 深見照子 観三の後妻。結婚して二十数年。「フカミ・パールは照子夫人の力で今日の大をなした」というのが業界の常識。
- 深見知子 観三と照子の娘。英文科の学生、二十歳。大上法心、増中利明の死がフカミ・パールに影を落としていることに悩む。心の支えは若波等の存在
- 深見時子 観三の姉、六十歳。夫が戦死し、戦後、実家に帰ってそのまま居ついている
- 相生説子 四十八歳。観三の先妻。関西財界の名門、相生コンツェルンの一人娘。深見本家の一族に絶望し

- 若波等 フカミ・パール勤務。英語が達者、通訳も。湖東加工水産の社長の弟
- 大上法心 五十代半ば。僧籍にあるといい、坊主頭。毎日、カメラを提げてぶらぶらしている。盗み撮りの名人とか
- 増中利明 フカミ・パール営業部長。増中を番頭格に採用したのは社長夫人
- 所是行 儲かることなら、何にでも手を出すブローカー。トーアロードのビルに事務所を置く
- 五味得一 アクセサリー・デザイナー
- 唐世道 台湾出身の真珠商
- 羅究遠 香港の青年実業家、二十七歳。細面の美青年。香港で真珠の養殖をするために研究中。既に半年、日本に滞在。唐世道のバイヤー
- ヘレン・バートン アメリカ人コルガール。北野町のマンション、コウベ・ヴィラに住む
- 世能警部 兵庫県警の警部

て離婚。離婚後、二十三年、実家に戻って独身のまま、有閑マダムのような生活をつづけている

● 相生至 説子の従兄、三年前に妻を亡くす、六十六歳。陸軍士官学校に進んだが、太尉で退役。退役後、特務機関に関係し大陸に滞在した。照子を仕事のアシスタントとして深見観三に紹介

『北京悠々館』 キャッチコピー & 登場人物 ほか

『北京悠々館』 キャッチコピー



講談社版表紙

一九〇三年、日露戦争前夜の北京。満州をめぐるの、日本、ロシアの虚々実々の駆け引き、清国政府要人への買収工作。ロシアと清国が秘密に協定!?窮地に追いこまれた日本は、巨額の買収費用を、パイプ役は日本側は古美術商土井策太郎、清国側は拓本取りの名人文保泰、場所は文の工房悠々館。大金授受の直後、内側から門のなかったその工房で文は殺され、金も消えていた。完全な密室殺人!!激動の清朝末期を鮮やかに捉えた歴史推理文学の傑作!

主な登場人物 ほか

●土井策太郎 家業は書画骨董商。父の親友で同業の鹿原氏の経営する鹿原商会に預けられ、商売の見習いをしている。二年前、義和団事件直後の北京で、拓本取りの名人文保泰に気に入られ、拓本の技法をマスター。今回、外務省にいる同郷の先輩からの「北京へ行つ

て那須啓吾に会ってくれ」との依頼・半ば命令で、再び北京へ。北京で会った那須は、「文保泰に近づき、ご機嫌を取り結んでおいてくれ」と言うが:

●那須啓吾 ベテランの諜報員。策太郎の外国語学校の先輩。北京内城、金魚胡同の宿舎に住む。当時、ロシアとの早期開戦をまくろむ日本は、早期開戦の障害となるロシア、清国の動きを阻止しようとしていた。那須啓吾は、北京におけるこの活動の一端を担っていた

●王麗英(ワンリーイン) 江蘇省出身、北京在住。かつて、東京の女子師範に留学。政治的グループのメンバー。東京時代、土井策太郎と面識あり

●李濤(リータオ) 日本留学の経験がある。政治的グループのメンバー。東京時代、土井策太郎と面識あり

●文保泰(ウエンパオタイ) 拓本技法の名人。裕福な素封家。鉄獅子胡同に屋敷をもつ。敷地内に新しく仕事場を造り『悠々館』と名づけている。西太后―慶親王―那桐のラインに繋がる民間のパイプ役

●芳蘭(ファンラン) 二十二歳の美女。那桐が慶親王から預かり、さらに、那桐の紹介で文保泰邸の召使いに

●老劉(ラオリウウ) 文保泰家の下働き

●慶親王 西太后を別格とする、最高の実力者。軍機大臣。外務部総理大臣

●那桐(ナートン) 慶親王に最も近い政界の大立者。外務部尚書、同会弁大臣、歩軍統領

●袁世凱 直隸総督。李鴻章亡き後、軍権を握る

●レッサー ロシア公使

●振貝子(しんばいし) 慶親王の長男。若くして「商部」の尚書

●張紹光(チャンシャオクワン) 探偵術の専門家、二十八歳。慶寛(紫禁城の忍者の頭目)の卵。探偵術の勉強に日本とイギリスへ留学。振貝子に気に入られている

■この作品には主人公はいるのだろうか?土井策太郎が主人公?と、思案しながら読み進むことに。けれど、結局、彼は最後まで、あまり重きをなさない。狂言回し程度で終る。一方、張紹光の存在が大きい。謎解きは張の役かと思えるのだが、この人物、こちら側の人間か向こう側か、つまり、味方が敵か、確信のないまま読み進み、終盤を迎えることに。

■作中時間及び舞台 日露戦争(一九〇四〜〇五)前夜、つまり、一九〇三年の北京が舞台

て那須啓吾に会ってくれ」との依頼・半ば命令で、再び北京へ。北京で会った那須は、「文保泰に近づき、ご機嫌を取り結んでおいてくれ」と言うが:

●老劉(ラオリウウ) 文保泰家の下働き
●慶親王 西太后を別格とする、最高の実力者。軍機大臣。外務部総理大臣
●那桐(ナートン) 慶親王に最も近い政界の大立者。外務部尚書、同会弁大臣、歩軍統領
●袁世凱 直隸総督。李鴻章亡き後、軍権を握る
●レッサー ロシア公使
●振貝子(しんばいし) 慶親王の長男。若くして「商部」の尚書
●張紹光(チャンシャオクワン) 探偵術の専門家、二十八歳。慶寛(紫禁城の忍者の頭目)の卵。探偵術の勉強に日本とイギリスへ留学。振貝子に気に入られている

『北京悠々館』表紙画像4点

『北京悠々館』は陳舜臣長編推理小説の中でもよく読まれた作品のようです。

「乱歩賞作家書下しシリーズ」の第一回配本として、1971年に講談社から出版されたあと、同社文庫本として1976年に、更に、徳間文庫(1989)から、そして集英社文庫(1998)でも出版されています。

4点すべての表紙画像をこの頁に紹介します。

講談社文庫版 →



徳間文庫版



集英社文庫版

『凍った波紋』の舞台は陳さん熟知の生活圈

『凍った波紋』の舞台は、

陳舜臣さん熟知の生活圈

抜粋引用します。

真珠商は選別や加工の場所が必要なので、彼らはおもに住宅地域である山手方面に、かなり大きな店を構えている。

神戸の山本通にあるフカミ・パールは、三階建、ブルー・タイルの建物で、一階が事務所、二階が加工場、三階は店員の寝泊りする場所となっている。(文庫版P.910)

山本通四丁目に移住センターがある。その移住センターの西はしから、再度山ドライブ・ウェイが山にむかつてのびている。(文庫版P.19)

陳舜臣さんは、一九六五年から五年ほど、移住センターの近く、山本通四丁目に住んでいました。陳さん宅のすぐ西には、村田真珠の社屋がありました。村田真珠以外にもあったのでしょうか？

また、当時、再度山ドライブ・ウェイのトンネル入口横から山に入り、太子の森を抜けて再度山に登るのが陳さんの日課になっていました。

そんな風に、小説の舞台は、陳さんにとって、勝手知ったる生活圈だったのです。

現在の「海外移住と文化の交流センター」↓

編集委員撮影



『北京悠々館』いくつかの補足

■中島河太郎氏「解説」から抜粋引用

「玉嶺よふたたび」(昭和四十四年)および「孔雀の道」(同年)で日本推理作家協会賞を授けられた氏は、ここに「北京悠々館」を完成した。時代は清末、日露の風雲急な明治三十六年のことである。ロシアが清国と密約を結べば、開戦の大義名分に困る日本は、清国要人を買収して、密約締結の阻止をはかろうとする。

緊迫した国際情勢を背景にしながら、骨董商の日本青年と、拓本技法随一の中国人が焦点となって、密室殺人と大金の消失の謎が提出される。舞台設定の心憎いばかりの巧みさは、氏の独壇場であり、歴史の背後にある哀歎にまで作者の目は注がれている。(傍線は編集委員)

■劉海髪(りゅうかいはいつ)

文中、王麗英(ワンリイエイ)を描写したくだりです。

前髪を額に垂らし、眉すれすれにそろえて切った、いわゆる劉海髪が、彼女にはよく似合った。(講談社版P.19)



女性や小さい子供の揃えて切られた前髪のことです。唐の時代、仙人に仕える劉海という子供がこんな前髪の姿をしていたことが由来のようです。画像はイメージ。ネットより。

■『北京悠々館』の密室トリック

『北京悠々館』を読んで、すぐに、『方壺園』が思い浮かびました。時代及び場所は異なりますが、どちらも、中国の建物での密室事件です。左に『方壺園』と『北京悠々館』を比較してみました。まだ、お読みでない方は、ぜひ、『方壺園』も併せてお読み下さい。

	方壺園	北京悠々館
時代	唐の時代 818、819年	日露前夜の1903年
場所	唐の都長安、豪商・崔朝宏の邸内にある「方壺園」(方形の壺のような建物)	清朝末期の北京。拓本技法の名人文保泰の工房、「悠々館」
事件	内側から門のかかった方壺園で詩人・高佐庭の死体が見つかる。寝台に寝た状態で、銅製の剣が心臓を少しはずれて刺さっていた。布団は乱れず、その中に入れた両手は少しも動いていなかった。刺殺以外にも死因が？	拓本を取る石碑の上に被さるようにして動かない文保泰の肩甲骨には、おもちゃの剣ていどの刃物が刺さっていた。その傷口から血が、石碑の表面にこぼれ落ちていた。そして、もう一つの異変、文保泰に渡したばかりの大金が消えていた
トリック	密室殺人	密室殺人